

今日、惣五郎は仕事が休みだったせいか、朝からどこぞで一杯飲んで気分がよくなった帰りがけ、自分の家の隣のおばさんと出くわしました。おばさんの手には、大きな鯛の頭と尻尾の部分を家の外のゴミ箱へ捨てようとしているところでした。

「おいおい、えらく立派な鯛を買ったんだな」

「あら、惣さん。なんだい、朝から飲んでるんかい？」

どうも聞いたところによると、隣の家の猫が病気になったようで、その看病のために鯛を買ったとのこと。

「んで、その頭と尻尾はどうするんでえ？」

「やだねえ、これはもう使わないから捨てるんだよ」

どーも、まだまだ飲み足りないと思っていた惣五郎には、何を思いついたのか、
「眼肉がうまいんだから、あつしに下さい」

と言つて、鯛の頭と尻尾を貰い受けました。

さて、家に戻り鯛の頭と尻尾をまな板の上ののせました。

「このままだと見栄えが悪いな。そうだ……」

惣五郎は、すり鉢を持ってきました。鯛の頭と尻尾を真ん中に置き、あたかも身もあるように見えるようにしました。

これで、肴はできました。あとはお酒だけです。

「しかし、酒を買う金はねえか……」

そんな時にやってきたのが、茂左衛門です。惣五郎とは飲み仲間、どうやら茂左衛門も今日は仕事が休みなようです。

「惣五郎、ちよつと金が手に入ったから、一緒に飲もう。今回は酒も肴も俺が用意してやるよ」

「おう、茂左衛門いいところに来た。俺もちょうどもう少し酒が飲みてえと思つたところよ」
そんなこんな言っていると、茂左衛門はまな板の上の例の『鯛』に気がつきました。

「いい鯛があるじゃないか！ よし、その鯛で一杯やろうじゃないか。じゃあ、酒だけでいいな。今、買ってくるわ。鯛さばいといてくれよ」

すり鉢をかぶせてあるので、茂左衛門は身がないことに気づきませんでした。そして、惣五郎が説明する前にお酒を買いに出かけてしまいました。

さて、惣五郎は困りました。今更、『あの鯛は、隣の猫の余り物で真ん中の部分がない』なんて言えません。いや、簡単に言えるとは思いますが、惣五郎のプライドが邪魔をします。

どーしたものと考えていると、茂左衛門が一升瓶を抱えて戻ってきました。

「おーい、酒買ってきたぞ。鯛はどうなった？」

「茂左衛門、それがさばいてる間に身だけ隣の猫にかっさわれちまったのよ……」

とつさに惣五郎が思いついたでまかせを言いました。そうすると茂左衛門は血相を変えて、

「どっちの隣だ？ ちょっと文句言ってくる！」

しかし、本当に文句を言いに行かれると、惣五郎は非常に困ったことになります。

「待ってくれ！ 俺は隣には日ごろから世話になっているんだよ……」

そう言うと、茂左衛門はしぶしぶ諦めてくれました。

「しかたないな。今日は俺が酒も肴も用意するつもりだったから、なんか別の肴探してくるわ」
そう言って、一升瓶を置いて茂左衛門はまた出て行きました。お酒を飲みたいと思っている人間の目の前に、無防備に置かれている一升瓶を見せられる時ほど、辛いものはありません。

「助かった……。しっかしあいつはいつたい、どんな酒を買ってきたんだろう？」

安心とともに、どんどんお酒が飲みたくなってきました。

「どうせあいつは一合上戸で、たいして飲まないからな……」

冷のまま、湯飲み茶碗に注いで、

「いい酒だ、うめえうめえ」

一杯飲みだすと、次から次へと注いでいってしまいます。

「どうせ半分は俺のものだから、先に飲んでも大丈夫だろう」

という訳の分からない考えで、とうとう、飲んだ量は半分を超えてしまいました。しかし、

「少し水で薄めりゃ分かりゃしないさ」

と言いながら、まだまだ飲んでいきます。

とうとう最後の少しというところで、その少しのお酒を部屋の畳にこぼしておきました。

「惣五郎、少し遠かったが、うまいと評判の鰻の蒲焼を買ってきたぞ」

しかし、惣五郎は寝ていますし、なんとと言っても、一升瓶の中が空になっています。

「おい！ なにやってるんだよ」

「ムニヤ、茂左衛門か……」

そして、惣五郎はハッと気づきました。

それからというもの、惣五郎の言い訳が始まります。

「いんにゃ、俺じゃねえんだよ……」

またも、惣五郎は隣の猫のせいになりました。

「うい……。鯛の身を取られた猫がまたやって来たんだよ。ヒック……。だから俺がとつちめてやろうと猫を家の中で追い回していたら、瓶にぶつかってひっくり返しちまったんよ」

「瓶を蹴飛ばして倒した。なんて事を……ん？ この野郎、酔っぱらってやがんな。やっぱり、めえが飲んだんだろう」

「こぼれたのを吸っただけだよ、湯飲みの酒もいけど、畳の上の酒はよう酔うわ」

そんなことを言っていると、本当に隣の猫がやってきました。病気は治ったのでしょうか？

「茂左衛門、ほおれ猫がお礼とお詫びを言いに来とるで」

確かに、見ようと思えば猫は頭を下げているようにも見えます。

「いや、そんなはずねえだろう……」

茂左衛門が疑うのも無理はありません。むしろ、それを信じるなんてどうかしていると思えます。

「いやいや、猫もちゃんと分かるとるんやで。ホレ、猫よ。言いたいことがあったら、言っておくれ」

そう惣五郎が言うのと猫は、惣五郎の家にある神棚の前で前足を合わせて、

「私は悪さをまったくしておりません。どうぞ、私はこの悪事災にゃんから逃れることができませうに」

と、猫は自らの身の潔白を証明しようとしたそうです。

おわり